

オーストラリアの“カモノハシ外交”を概観する： 第二次世界大戦から現在まで

浅原正和

要旨

国家間における動物の贈与は、歴史的に外交の一手段として用いられてきた。先行研究において、オーストラリアが歴史的に“カモノハシ外交”とも呼べるカモノハシの国外移送をイギリス、アメリカに対して行ってきたことが論じられている。それに加え1990年代、カモノハシを移送する試みが日本に対しても進んでいた。これら3か国への移送計画は、それぞれ異なる組織が異なる目的のため進めたものだった。1943年のイギリスへの移送は英首相ウィンストン・チャーチルのリクエストであったが、一方で戦時下におけるオーストラリア政府の外交政策の一環でもあった。これまでこの移送は戦時中、機密事項であったとされていたが、顛末を報道する新聞記事も戦時中に発行されていた。なお、生体の移送に先立って送られた剥製は、ポーランドでチャーチルを助けた隊に所属していたエディー氏の飼育個体であった。1916～58年にかけて試みられたアメリカへの移送は、動物商や動物園といった民間が主導して進めた。1947年の移送も動物園間の交渉で始まるが、オーストラリア政府が輸出許可を出さなかった関係で政治家が動いた。最終的に、カモノハシを戦時中の返礼とみなすということでも許可が下りる。日本の東京で1996年に開催が予定されていた博覧会でカモノハシが展覧される計画は、ニュー・サウス・ウェールズ州フェイ首相と、東京都鈴木知事との間で自治体外交として進められた。しかし、1995年に両者の首長が交代することで、計画は中止に追い込まれる。これら時代ごとに計画があったカモノハシの移送先は、オーストラリアの経験してきた国際情勢の変遷と関連している。まず、第二次世界大戦前後で、国防の依存先がイギリスからアメリカへ替わったことは、戦中・戦後のカモノハシの送り先に象徴されている。そして、20世紀終盤に最大の貿易相手国となった日本との間で自治体外交が活発化し、そのことが日本へのカモノハシ移送計画を生み出した。

はじめに

国家間における動物の贈与は、歴史的に外交の一手段として用いられてきた。例えば、中国がパンダの諸外国への贈与、貸与を外交の道具として用いてきたことは有名であり、その行為は「パンダ外交」とも称されている（家永2009；2011）。このような動物を用いた外交は、パブリックディプロマシーの一環であり、送り先の国民に送り元の国家に対する心理的な親近感を抱かせる意義がある。例えば、日中戦争期に、中国の国民政府は緻密な宣伝戦略のもと、パンダをアメリカに贈呈することで両国の友好を演出するとともに、両国が共通の価値観を持つ文明国であることをアピールする道具とした（家永2009；2011）。

このような外交の手段として用いられる動物は、受け手側の国民に十分な訴求力を持つことが必要となる。つまり、その国に固有であり、珍しく、希少で、シンボリックな特徴を持つ動物である必要がある。オーストラリアは、コアラやカンガルーをはじめとして、このような動物を多く抱える国である。なかでも、卵を産む哺乳類であり、くちばしをもち、毛皮と水かきを持つカモノハシは、この

ような特徴に最も合致する動物の一つと考えられる（注1）。

このようなカモノハシであるが、過去にオーストラリア国外へと持ち出されたことが何度かあることが知られている。国外への移送に関わった人物の自伝として、Burrell（1927）や、Fleay（1980）がある。また、先行研究において、オーストラリアが歴史的に“カモノハシ外交”とも呼べるカモノハシの移送をイギリスとアメリカに対して行ってきたことが論じられている（Cushing and Markwell, 2009；Lawrence, 2012）。一方、これらの文献では触れられていないが、計画だけで実現しなかったものの、1990年代、カモノハシを国外移送する試みが日本に対しても進んでいたことが辻井（1999）では論じられている。本稿では、これまであまり扱われてこなかった、カモノハシの日本への移送計画について掘り下げつつ、オーストラリアの“カモノハシ外交”の歴史を概観する。

I. カモノハシ国外移送の歴史

これまでの研究

カモノハシを生体のままオーストラリア国外へと移送しようとした事例は辻井（1999）や Cushing and Markwell (2009) でまとめられている。送り先として記録があるのは、1913年のハンガリー・ブダペスト動物園、1943年のイギリス、1922年、1947年、および1958年のアメリカ・ニューヨーク・ブロンクス動物園の3か所である（辻井1999；Cushing and Markwell 2009）。これらを本稿で収集した情報と併せて表1にまとめる。

ハンガリー・ブダペスト動物園の事例（誤認）

辻井（1999）は Carrick et al. (1982) や Crandall (1963) を引用して、ハンガリーへ送られた多数の動物標本の中にカモノハシ2個体が混ざっており、1913年3月にブダペスト動物園に到着、うち1個体は同年12月まで、残り1個体は1917年まで生存したと記述している。Cushing and Markwell (2009) も、Jackson et al. (2001) を引用して、このハンガリーへの移送に触れている。しかし、当時カモノハシ飼育の泰斗であったヘンリー・バレル（Henry Burrell）をはじめ、オーストラリアのカモノハシ研究者はこのことを知らずにいたようであることから（ブダペスト動物園から問い合わせもなかったということ）、ブダペスト動物園の事例はハリモグラを間違えてカモノハシと記述したものであろうと結論付けている（Cushing and Markwell 2009）。カモノハシ飼育で有名なデイビッド・フレイ（David Fleay）

注1：カモノハシがいかに一般に大きな訴求力を持つ動物であるかという点に関して、著者の経験を以下に記したい。著者は生物学（哺乳類の進化学）を専門としており、2016年に著者はカモノハシがその祖先オブドゥロドンに対して歯を失ってしまった原因がくちばしの電気感覚の発達にあったことを論じた研究を発表した（Asahara et al. 2016）。この研究は一見地味な形態学の研究であるが、対象であるカモノハシがクローズアップされ、世界5か国で一般向けに報道された（日本：日本経済新聞ほか多数の新聞・メディア、オーストラリア：Cosmos誌、アメリカ：Today's Science等、ドイツ：Naturwissenschaftliche Rundschau誌、ブラジル：Folha de S.Paulo紙）。また、2012年に著者が京都大学総合博物館で企画展示の分担を行った際には、多数の哺乳類動物標本を用いた新機軸の展示（浅原2014）を設計した。その企画展示を報道する新聞記事のなかで、唯一題名に取り上げられた動物種がカモノハシであった（「骨格標本いろいろ カモノハシの剥製も」中日新聞2012年6月17日京都朝刊）。このように、カモノハシは人々の注意を引きつけてやまない動物であるといえる。

の著書を見ても、(1943年のカモノハシ移送計画を扱った章で)「no living platypuses – not a single one in fact – had (or has) ever reached any part of Europe」との記述がある (Fleay 1980 : p54)。他の研究者も同様の解釈をしているようで、Jackson et al. (2001) はカモノハシの飼育年を動物園ごとに表にしているが、ブダペスト動物園については「？」付きで記述している。移送過程が記録されているそのほかのカモノハシ移送事例では、特別な移動式の水槽付き飼育装置「Platypusary」をそのまま輸送することでカモノハシの移送を可能にしており、それでも輸送のストレスによる失敗が相次いでいる (Burrell 1927 ; Feay 1980 ; 辻井 1999 ; Cushing and Markwell 2009)。これはカモノハシが他の動物標本に交じっ

表 1. オーストラリア国外へのカモノハシ移送に関する年表

年	送付先国	事項	送付元の主要人物	送付先の組織・主要人物
(1913年)	ハンガリー (誤認)	オーストラリアからハンガリー・ブダペスト動物園に送付された動物の中にカモノハシ2頭が混入していたという記録があるが、おそらくハリモグラの間違いと考えられる。		
1916年	アメリカ合衆国	動物商のジョセフ氏がアメリカ(ニューヨーク・ブロンクス動物園)への輸送を試みる。送られた1頭は海上で死亡。	動物商ジョセフ氏	ブロンクス動物園
1922年	アメリカ合衆国	動物商のジョセフ氏がアメリカ(ニューヨーク・ブロンクス動物園)への輸送を試みる。送られた5頭中4頭は海上で死亡。1頭がニューヨーク・ブロンクス動物園に到着するが、その後49日で死亡。	動物商ジョセフ氏	ブロンクス動物園
1943年	イギリス	英首相ウィンストン・チャーチルのリクエストにより、カモノハシ1頭がイギリスに向けて送られる。海上で死亡。	オーストラリア・エバット外相	英国チャーチル首相
1947年	アメリカ合衆国	ヒールズビル動物園のフレイ園長がアメリカ(ニューヨーク・ブロンクス動物園)への輸送を行う。送られた3頭は長いもので11年以上飼育され、展示は大成功となる。	ヒールズビル動物園フレイ園長	ブロンクス動物園
1958年	アメリカ合衆国	ヒールズビル動物園のフレイ園長がアメリカ(ニューヨーク・ブロンクス動物園)への輸送を行う。送られた3頭は年内に死亡してしまう。	ヒールズビル動物園フレイ園長	ブロンクス動物園
1996年	日本(中止)	ニュー・サウス・ウェールズ州フェイ首相と東京都鈴木知事の間で、東京都で開催される世界都市博覧会(東京フロンティア)でのカモノハシ展示が決定される。その後、1995年のNSW州議会選挙の結果、フェイ首相が退陣し、また東京都知事選の結果、世界都市博覧会が中止となり、カモノハシ展示は行われなかった。	ニュー・サウス・ウェールズ州フェイ首相	東京都鈴木知事

て長い航海を行えるような生き物でないことを示している。このことから、ブダペスト動物園の事例はハリモグラである可能性が高いと思われる。(注2)

イギリスへの移送を試みた事例

第二次世界大戦中の1943年3月、メルボルン郊外にある私立ヒールズビル動物園でカモノハシを飼育していたデイビッド・フレイ園長(David Fleay)のもとに、カモノハシを6頭(半ダース)イギリス本国に送ってほしいとの要請が届く(Fleay 1980)。これは英首相ウィンストン・チャーチル(Winston Churchill)からのもので、オーストラリア首相経由で届いた要請であった。同年5月にも米英豪の首脳が集まった会議(第三回ワシントン会談; The Trident Conference)でも、チャーチルから直接、オーストラリア政府の代表として出席していた外相ハーバート・エバット博士(Herbert Evatt)に催促があったという(Moyal 2001)(注3)。

フレイはヒールズビル動物園園長としてカモノハシの飼育を成功させたことで有名な人物である。当時飼育していたジャックとジルという2頭のつがいのカモノハシは、カモノハシの飼育期間世界記録を塗り替えつつあり、彼とそのカモノハシたちは英連邦諸国で有名な存在となっていた(Moyal 2001)。Moyal(2001)は、おそらくチャーチルも彼らのことを知っていたのではないかと記述している。

この要請を受けてフレイは、有名な2頭のカモノハシは送らないかわりに、新たにカモノハシ1頭を捕獲し、その後、移動式カモノハシ飼育装置 Platypusary に順応させた上で、装置ごとイギリスに運ぶ計画を立てた(Fleay 1980)。フレイは4月にオスのカモノハシを捕獲し、「ウィンストン」と名付け、9月に送り出した(Fleay 1980)。「ウィンストン」を輸送する Port Phillip 号はパナマ運河を経由し、大西洋をイギリスへ向かったが、リバプールに着く4日前に船のソナーが潜水艦を探知し、対潜水艦戦となった(Fleay 1980)。そのすぐ後に「ウィンストン」の死亡が確認されたため、フレイをはじめとする多くの著者は、この時の爆雷の衝撃とストレスが原因で「ウィンストン」が死亡したと考えている(Fleay 1980; Moyal 2001)。戦後すぐにこのことを伝える報道がいくつかなされているが、これらも爆雷が「ウィンストン」の死因となったと結論付けている(「Platypus for Mr. Churchill」News, Adelaide 1945年11月1日; 「Churchill nearly got a platypus」Daily News, Perth 1945年11月6日; 「Depth changes kill platypus」Sun, Sydney 1945年12月8日)。一方で、爆雷の衝撃はそこまで大きくなく、船のルートが計画よりも遠回りになったため餌が不足し、栄養状態が悪化していたことを含めた複合的な要因が「ウィンストン」の死に影響したという見解もある(Cushing and Markwell 2009; Lawrence 2012)。

フレイは、「ウィンストン」の亡骸が剥製となってチャーチルのもとに送られ、戦時中、執務机の上

注2: このように、カモノハシとハリモグラを取り違えてしまうことは、現代でも起こる問題のようだ。余談になるが、この原稿を書いている中、著者のもとにNHKから問い合わせがあり、著者が映像中の動物がカモノハシかハリモグラかを同定した。これはNHKがタロンガ動物園(シドニー)で最近誕生したハリモグラの赤ちゃんの画像を、間違えて「カモノハシの赤ちゃん」とテロップをつけて報道してしまったことが発端であった。放送後、オーストラリア在住の視聴者などから指摘があり、その確認・訂正のため著者のアドバイスを求めてきたものだった。これは映像の提供元であったフランスのテレビ局がカモノハシとハリモグラを取り違えてテロップを入れていたことが原因のようである。ハリモグラも子供の時期は鼻先が比較的平たく、カモノハシのくちばしのように見えなくもない。そのため、このような間違いはよく起こるようである。

注3: なお、5月の会談記録にはカモノハシの件が記述されておらず(United States Department of State 1943)、会議外の懇談の中で追加の催促がなされたようである。

に置かれていたと考えていた (Fleay 1980)。これは、戦後フレイのもとを休暇で訪れたイギリスのアランブルック陸軍元帥 (Alan Brooke) が、チャーチルの執務机の上にカモノハシの剥製が置かれていたことを話したことが発端となっているようである (Moyal 2001)。また、「ウィンストン」が剥製となって「ダウニング街 10 番地にある」とする報道もあった (「Depth changes kill platypus」Sun, Sydney 1945 年 12 月 8 日)。しかし、オーストラリアのエバット外相は、「ウィンストン」の移送に先立ち、1943 年 6 月、ロバート・エディー氏 (Robert Eadie) によって長く飼育されたのち剥製となっていたカモノハシ「スプラッシュ」(Splash) をチャーチルのもとに航空便で送っている (Cushing and Markwell 2009; Lawrence 2012)。Cushing and Markwell (2009) によれば、チャーチルの執務机の上に置かれていたのはスプラッシュであるという。一方、チャーチルは戦災でカモノハシの標本を失った The Royal College of Surgeons に「ウィンストン」の剥製標本を送ることを許可したようである (Cushing and Markwell 2009; Lawrence 2012)。

なお、このロバート・エディーは、初めてカモノハシを飼育した人物として知られる (以下「Helped Rescue Churchill」News, Adelaide 1949 年 6 月 10 日; 「Victorian's Two Achievements」Sydney Morning Herald 1949 年 6 月 11 日; 「"Platypus" Man Dies」Courier-Mail, Brisbane 1949 年 6 月 11 日; 「Funeral of Mr. Robert Eadie」Healesville Guardian 1949 年 6 月 18 日による)。エディーはオーストラリア・ビクトリア州生まれであったが、その後南アフリカに移り、ボーア戦争 (Second Boer War) に情報将校として従軍した。エディーが所属していた部隊は、敵軍の捕虜となっていたウィンストン・チャーチルが逃走した際、それを助けている。このことは先行研究では触れられていない。

フレイはこのカモノハシ移送が戦時中機密事項であったとし (Fleay 1980)、この事実は戦時中一般には知られることがなかったという (Cushing and Markwell 2009; Lawrence 2012)。ところが当時の新聞記事を調べると、オーストラリアの「Mr. Churchill」信奉者がカモノハシをプレゼントとして送ったが海上で死亡した、との小さな記事が 1944 年に掲載されている (「Oddments」Kadina and Wallaroo Times, Adelaide 1944 年 8 月 11 日)。つまり、この事実は全くの秘密というわけではなかったようである。とはいえ、この記事では「Mr. Churchill」が何者かも詳しく書かれていない。本件に関する詳細な報道は終戦後の 1945 年 11 月から始まる (「Platypus for Mr. Churchill」News, Adelaide 1945 年 11 月 1 日; 「Churchill nearly got a platypus」Daily News, Perth 1945 年 11 月 6 日; 「Depth changes kill platypus」Sun, Sydney 1945 年 12 月 8 日)。

なお、このときフレイが送らなかつたつがいのカモノハシは繁殖に成功し、カモノハシの飼育下での初の繁殖例となる (Fleay 1944)。カモノハシの飼育下での繁殖は、その後 1998 年まで成功しなかった (Holland and Jackson 2002)。

最初のアメリカへの移送

カモノハシがアメリカ合衆国に送られた最初の事例は、Cushing and Markwell (2009) によると、イギリスへの移送を試みたよりも古く、1922 年である。これには別な情報もあり、別途記述する。以下、Cushing and Markwell (2009) がまとめたところによると、これは動物商のジョセフ氏 (Ellis Stanley Joseph) によるものである。ジョセフ氏は 1916 年からはほぼ毎年、ニューヨークのブロンクス動物園に様々なオーストラリアの動物を納入していた。彼はアメリカへカモノハシを送る計画のため、1910 年代後半にシドニーでカモノハシ飼育の経験を積んだ。そして 1922 年に、カモノハシ飼育で有名なヘンリー・バレルのアドバイスを受けながら、5 頭のカモノハシを運び出した。しかし、ニューヨークの動物園に生きて到着したのは 1 頭で、その 1 頭も 6 週間で死亡してしまった。

ヘンリー・バレルの著書によると、ジョセフ氏は1913年にバレルに面会し、その際にはアメリカへカモノハシを送る計画を抱いていたようである（Burrell 1927）。以下、Burrell (1927) によれば、ジョセフはその後バレルの指導のもと輸送のための装置を作るなどし、1916年に初めて自ら輸送を試みるが、S.S. Niagara号でカナダに向かう旅路の間、1週間は飼育できたものの、カモノハシは死亡してしまった。その後、カモノハシ飼育のトレーニングを積んだジョセフは、1920年に1年間飼育し続けることに成功していたオスのカモノハシ個体の輸送計画をオーストラリア政府に申し出る。しかし、計画は却下されてしまう。その後、失意の中カモノハシが逃げ出してしまうなどのトラブルに見舞われる。しかし、ジョセフはアメリカにカモノハシを送ることをあきらめず、連邦政府からの許可を得るため奔走し、1922年に輸出が可能となった。1922年の5月12日、5頭のオスのカモノハシとともにシドニーからU.S.S. West Henshaw号で出航し、ニューカッスル（NSW州）とホノルルを経由してサンフランシスコに向かったが、途中4頭のカモノハシが死んでしまった。6月30日、サンフランシスコで1頭が生きたままアメリカに上陸した。その後、餌と水の確保に苦勞しながら、ニューヨークまで鉄道輸送に成功する。ニューヨークには7月14日に到着し、ブロンクス動物園では園長ホーナディ（Homaday）の歓迎を受ける。カモノハシは動物園で49日間生存し、毎日1時間ずつ観客に展示されたとのことである。

1938年にジョセフが死去した際の記事（「Ellis Joseph dies; animal collector」The New York Times 1938年9月18日）によれば、彼はもともとインド・ボンベイ生まれであった。彼は最初シドニーを本拠に活動し、コアラを初めてアメリカに持ち込んだ人物でもあった。このカモノハシの移送のあと、1923年にニューヨークに本拠を移し、1938年、ブロンクスで死去した。

フレイによるアメリカへの移送

その後、カモノハシをアメリカに輸送する計画は1947年と58年にデイビッド・フレイによって行われる（Fleay 1980；辻井 1999；Cushing and Markwell 2009）。

1944年にカモノハシの飼育下での繁殖に世界で初めて成功したフレイは世界的な名声を獲得する（Cushing and Markwell 2009）。そのフレイのもとに、1946年2月、New York Zoological Society（ブロンクス動物園を運営する上部組織）の会長（President）オズボーン（Fairfield Osborn）からカモノハシを送ってほしいとの電報が届く（Fleay 1980）。フレイは移送の準備を進めるが、計画は連邦政府から「Shipment of three platypuses to United States not in the national interest. Export forbidden」（Fleay 1980）、あるいは「exportation of platypuses not considered to be in the national interest」（Cushing and Markwell 2009）として一度却下される。このことはいくつかの新聞も報道している（「Platypus export banned」Daily Advertiser, Wagga Wagga 1947年3月22日；「Platypus export prohibited」Canberra Times 1947年3月22日）。Cushing and Markwell (2009) によれば、これには1933年に成立した在来生物の保護法が影響していたようである。このカモノハシ移送にはブロンクス動物園からヒールズビル動物園に費用が支払われることになっており、動物の売買に類似する行為として、保護法の趣旨に添わないとの判断がなされたようである（Cushing and Markwell 2009）。ここで、フレイの働きかけにより、フレイの友人でもあるビクトリア州首相で自由党政治家のホロウェイ（Tom Hollway）氏が仲介の労をとる（Fleay 1980；Cushing and Markwell 2009）。彼の仲介により、メンジーズ（Menzies）氏とエバット博士を経由して、労働党内閣の所管大臣（Minister for Trade and Customs）を紹介される（Fleay 1980）。エバットは前述のようにチャーチルにカモノハシを送った際に関わった人物でもある。ホロウェイの仲介により、最終的にカモノハシはオーストラリア・チフリー首相（Ben Chifley）から米・トルーマン大統領（Harry S. Truman）

へ贈られる、戦時中の協力に感謝する贈り物とみなせるということで、無事に許可が下りた（Cushing and Markwell 2009）。カモノハシは3月27日にヒールズビル動物園を出発することができた（Fleay 1980）。

1947年の輸送は成功をおさめ、3頭のカモノハシがブロンクス動物園に到着し、4月28日から展示が始まる。そのうち1頭は1948年9月にエサ不足と肺炎で死亡するまでの1年以上、もう1頭は1957年8月1日に逃亡するまで、最後の1頭は1957年9月18日に死亡するまで、11年以上の期間、飼育することに成功した（Fleay 1980）。

この展示が成功であったことは、ブロンクス動物園で飼育されていた最後のカモノハシが死亡したその年内にフレイのもとにカモノハシ移送の要請が来たことから伺える（ブロンクス動物園・Dr. John Tee Vanからの連絡）（Fleay 1980）。そしてクイーンズランド州とコモンウェルス政府の許可のもと、1958年にカモノハシ3頭の移送が行われることとなる（Cushing and Markwell 2009）。この際は空輸という方法を選択し、飛行機に搭載できるような小型のPlatypusaryを作成し利用した（Fleay 1980）。6月3日にクイーンズランド州の動物園を出発したが、搭乗予定の航空機が経由地のフィジーで機材故障を起こしたため、シドニーからの出発が48時間遅れるというトラブルがあった（Fleay 1980）。また経由地のハワイではオーストラリアの土を持ち込めないとわれ、Platypusaryの土を入れ替え、草で作られた巣穴も壊されてしまった（Fleay 1980）。ニューヨークには6月7日に到着した。その後6月13日にはNew York Zoological Societyのオズボーン会長やオーストラリア総領事フランシス卿（Sir Josiah Francis）を交えた昼食会の後、報道陣に対してカモノハシたちのお披露目が行われた（Fleay 1980）。しかし、その後、年内にこのカモノハシたちは死亡してしまう（Cushing and Markwell 2009）。

以下、Cushing and Markwell（2009）によれば、1960年代に入ると、カモノハシをはじめとするオーストラリアの動物の国外への移送はより厳格に規制されるようになる。これは野生動物の保護と、オーストラリア国内への観光客を呼び込むという二つの目的があった。そのため、カモノハシの海外への移送は極めて困難となった。一方で、1982年の「Wildlife Protection (Regulation of Exports and Imports) Act」により、動物に大きなリスクがない場合、海外への移送の機会が生まれた。その結果、80年代以降、日本各地の動物園にコアラが送られることにもつながった。

II. カモノハシの日本への移送計画

これまでの報告

Cushing and Markwell（2009）は、カモノハシのオーストラリア国外への移送は、1958年にアメリカへ送られた例を最後に試みられたことはない結論付けている。しかし、辻井（1999）は、日本の新聞記事をもとに、1996年にカモノハシを日本に移送し、東京で開催される世界都市博覧会において展示する計画があったことに触れている。辻井（1999）は、この計画は世界都市博の中止と、ニュー・サウス・ウェールズ州フェイ首相の退陣により「自然消滅した」とまとめているが、本章ではこの経緯を、日本・オーストラリアの報道記事や、東京都の広報の情報をもとに、より詳細にまとめる。なお、以下に記述するカモノハシ移送計画に関した事項の時系列を表2にまとめる。

名古屋への移送計画

以下、中日新聞の記事（「東山一タロンガ姉妹動物園、実現へ 豪大臣、西尾市長に提案」中日新聞1990年7月28日朝刊）によれば、名古屋市がシドニーと姉妹都市提携を結んだ縁もあり、名古屋の

東山動物園は1984年にNSW州立タロンガ動物園からコアアラを受け入れていた。1990年7月27日、シドニーで行われた姉妹都市提携10周年記念のパーティの席上で、ニュー・サウス・ウェールズ州（以下、適宜、NSW州と略す）ティム・ムーア環境大臣（Timothy Moore）は、NSW州立タロンガ動物園と東山動物園の姉妹動物園提携を提案した。その席で、サザerland前シドニー市長（Doug Sutherland）が、「姉妹動物園になるなら、これまで門外不出だったカモノハシの寄贈に尽力したい」という発言をしたという（表2）。

表2. 日本でのカモノハシ展示計画に関する年表

年月日	事項
1990年 7月27日	NSW州ムーア環境大臣がシドニー市内で開かれた名古屋・シドニー姉妹都市提携十周年記念パーティの席上で東山動物園とシドニー・タロンガ動物園の姉妹提携を提案。パーティに出席した前シドニー市長サザerland氏が「姉妹動物園になるなら、これまで門外不出だったカモノハシの寄贈に尽力したい」との発言をしたと日本で報道される。
1993年 6月15日	NSW州フェイ州首相が名古屋・東山動物園でコアアラの贈呈式に出席。西尾名古屋市長にシドニーのオリンピック開催地立候補についての支援要請を行う。西尾市長が名古屋のカモノハシ受け入れについて提案、フェイ首相はそれについて力を貸す意思を表明したと日本で報道される。
6月16日	NSW州フェイ州首相らの一行が東京を訪問、都市博でのカモノハシ特別展示に関する共同声明に調印する。
6月17日	東京フロンティア（世界都市博覧会）にカモノハシが出展されることが決定したとの報道が日本でなされる。
6月21日	NSW州政府の提案したカモノハシ（2頭）の日本（東京）への移送計画に連邦政府のケリー環境大臣が反対の意向であり、厳しい条件を課したことがオーストラリアで報道される。移送に反対する動物学者の意見も付記されている。
1994年 8月23日	鈴木俊一都知事がNSW州を訪問し、フェイ州首相と共同声明に調印したほか、カモノハシを見学する。
12月7日	NSW州が提出した日本（東京・都市博）へのカモノハシ移送計画に許可を出すべきかオーストラリア連邦政府の公聴会にかけられることがオーストラリアで報道される。計画はタロンガ動物園から上野動物園への半年間の貸し出しという内容であった。
12月17日	Wildlife Protection Authority 関係者の発言として、日本（東京・都市博）へのカモノハシ移送先が動物園でなく博覧会であることから、移送が許可されるであろうとの見込みがオーストラリアで報道される。一方で、同氏はカモノハシが神経質な生き物であるから輸出が禁止されていたという側面も述べている。
12月27日	東京・都市博でのカモノハシ展示には動物福祉・倫理に関して問題があるとの報道がオーストラリアでなされる。
1995年 3月25日	NSW州州議会選挙でフェイ率いる自由党・国民党連合政権が敗北。環境保護を掲げる野党労働党が勝利する。
4月9日	東京都知事選において都市博中止を主張する青島幸男氏が当選する。
4月10日	東京都・鈴木俊一都知事の発言が報道される。「世界都市博を中止するという青島さんの公約は『それは困難』」とのこと。
4月11日	都議会・公明幹部が都市博中止を示唆したことが報道される。鈴木都政の都議会与党として初めて中止に言及した。
4月15日	東京都・青島新都知事が都市博中止を明言したことが報道される。
4月20日	NSW州アラン新環境相が都市博へのカモノハシ出展計画の撤回を発表する。
4月21日	青島都知事が会見で都市博中止の意向を表明する。
5月31日	青島都知事により都市博の中止が正式決定される。

その後、1993年6月15日には東山動物園へのコアラの贈呈式にNSW州ジョン・フェイ(John Fahey)州首相の一行が出席した(「コアラの次はカモノハシを 西尾市長 豪の州首相に強い期待」中日新聞1993年6月16日朝刊・市民版)。以下、この記事によると、フェイ首相は西尾名古屋市長を表敬訪問し、シドニーが2000年の夏季オリンピック開催地に立候補していることについて支援要請をした。また、カモノハシの受け入れを西尾市長から提案され、フェイ首相は「アシスト」する意思を示したという。この一件は、読売新聞では名古屋側が要望し、NSW政府側が外交辞令で「努力してみましよう」と答えたという文脈で報道されている(『カモノハシを東山に』/名古屋市長 『努力してみましよう』/豪の州首相 読売新聞1993年6月16日中部朝刊)。このように、名古屋市はカモノハシ受け入れについて積極的だったようである。

東京への移送計画

1993年6月に名古屋市を訪問したフェイ州首相一行は、その後(大阪を訪問したのち)新幹線で東京へ向かう(東京都生活文化局国際部, 1994)。そして6月16日、東京都鈴木俊一知事と、NSW州ジョン・フェイ首相の間で共同声明(図1)が調印される(東京都生活文化局国際部, 1994)。これは鈴木知事が進めていた、1996年開催予定の博覧会、「東京フロンティア(世界都市博覧会)」(以下、適宜、都市博と略す)へNSW州が出展し、カモノハシの特別展示を行うという声明であった。翌日の報道によれば、これはフェイ州首相が鈴木都知事に申し出て決まったものという(「カモノハシ3年後に来日 豪で60年間門外不出の珍獣 東京フロンティアに出品」読売新聞1993年6月17日東京朝刊)。1958年以来となるカモノハシの国外展示が、自治体政府の主導によって実現しようとしていた。

ところが、この東京でのカモノハシ展示計画はオーストラリア国内からの反発を招く。共同声明の調印から5日後の6月21日には、連邦政府のケリー環境大臣がこの計画に反対の意向であり、厳しい条件を付与したとの新聞報道がなされる(「Platypus pair may not travel for exhibition」Canberra Times 1993年6月21日)。この報道には2名の動物学者もカモノハシの輸送に反対している旨が記されている。

しかし、カモノハシの展示計画は着々と進められていく。翌1994年、鈴木都知事はNSW州を訪問し、フェイ州首相との共同声明に調印したほか、シドニーのタロンガ動物園でカモノハシの見学をする(「友好都州10周年、共同声明に調印 訪豪中の鈴木知事/東京」朝日新聞1994年8月24日東京朝刊)。この年は東京都とNSW州の友好提携10周年であり、鈴木都知事を代表とする友好代表団の派遣という形であった(東京都生活文化局国際部, 1995)。また、この年の10月18日にはタロンガ動物園のジャック・ジャイルズ博士が上野動物園で「カモノハシの全て—オーストラリアの希少動物の保護—」と題した講演をしており(東京都生活文化局国際部, 1995)、カモノハシ移送に向けた布石を打っていることが伺える。この時点で、都市博の「目玉」として、カモノハシの展示が考えられていたようで、報道でも「今のところの目玉は豪州の珍獣カモノハシと宇宙ステーションの実物大模型だ」という記述がみられる(「未来都市体験、目玉はカモノハシ?」読売新聞1994年9月17日朝刊)。カモノハシは珍しい生き物として、集客力が期待できる展示とみなされていたようだ。

その後、1994年末には、カモノハシの移送に関するオーストラリア国内の動静がいくらか報道されている。12月7日にはNSW州政府が提出したカモノハシ移送計画について許可を出すべきかどうか、連邦政府が公聴会を開くことが報道される(「Platypus exports subject to inquiry」Canberra Times 1994年12月7日)。この報道によれば、タロンガ動物園から上野動物園へ複数のカモノハシを半年間貸与するという計画であったようだ。12月17日の報道では、Wildlife Protection AuthorityのDeputy Directorであるロバート・ムーア氏(Robert Moore)の発言が記述されている(「Two expatriates make a home in

the Bronx Zoo」The Age, Melbourne 1994年12月17日)。この記事によると、カモノハシの輸出は Wild Life Protection Act によれば禁止されていたが、日本（東京・都市博）へのカモノハシ移送の場合、移送先が動物園でなく博覧会であることから許可が与えられるであろうとの見込みが記述されている。一方で、同氏はカモノハシが神経質な生き物であるから輸出が禁止されていたという側面も述べている。それに対し、12月27日には、カモノハシの移送には動物福祉、動物倫理に関する問題があるとの報道がなされている（「Perils of a foreign platypus parade」The Age, Melbourne 1994年12月27日）。この記事では、過去にアメリカに輸送した際に多くのカモノハシが死亡したことや、そもそも事例が少ないことに触れ、またタロンガ動物園が主張する教育的意義も疑わしいと主張している。また、カモノハシ受け入れに伴い、オーストラリア動物相の保全のための基金が払い込まれる予定であるが、それはタロンガ動物園の影響下にあるトラストファンドに入るため、直接野生のカモノハシの保護や研究に用いられないのではないかという危惧も述べている。「海外の友人」には自然の状態でカモノハシを見てもらえばよいという記述もあり、批判的な内容である。

そして、翌1995年には、事態は急展開を見せる。3月25日、NSW州の州議会選挙で、フェイ率いる自由党・国民党連合政権は敗北し、環境保護を掲げる野党労働党が勝利する（「都市博へのカモノハシ出展を撤回 政権交代の余波で 豪の州政府」朝日新聞1995年4月21日朝刊）。さらに、その直後、4月9日には東京都知事選で都市博中止を主張する青島幸男氏が当選する（「東京 青島氏 議会対策に厳しさ」中日新聞1995年4月10日朝刊）。この公約に対し、都市博を推進してきた鈴木都知事はすでに困難であると報道陣にコメントしている（「鈴木知事びっくり『都市博中止は困難』」中日新聞1995年4月10日夕刊）。しかし、4月11日には都議会与党の幹部が都市博中止に言及し（「都議会公明幹部が世界博中止を唆」中日新聞1995年4月11日夕刊）、4月15日には青島新都知事が都市博



共同声明

ジョン・フェイ ニュー・サウス・ウェールズ州首相は、1993年6月15日から17日まで、東京都を訪問し、鈴木俊一東京都知事及び都民から盛大な歓迎を受けた。

東京都とニュー・サウス・ウェールズ州は1984年5月に友好関係を締結して以来、文化、技術、経済の各面において広範な交流を行ない、両市民の友好と理解に大きく寄与してきた。

東京都とニュー・サウス・ウェールズ州との友好関係を重視し、また、「東京フロンティア」の重要性に鑑み、フェイ首相は、1996年開催の「東京フロンティア」に参加することを表明した。この参加には、ニュー・サウス・ウェールズ州のシンボルとして世界的に知られる「かものはし」の特別展示が含まれる。このため、ニュー・サウス・ウェールズ州政府は、既に、オーストラリア政府から、満足できる準備がなされるという条件のもとに、「かものはし」の出展に関し、合意を得ている。

鈴木知事は、この参加に対し謝意を表し、双方が必要準備を固たすために努力をするとともに、「東京フロンティア」の成功に向けて、両都府が緊密に協力していくことを約束した。鈴木知事は、また、コアラをはじめとするオーストラリアの希少動物の保護のための研究への支援を確認した。

両首長は、1994年には、友好10周年に因連した交流事業を展開し、21世紀に向けて、友好関係を強化することを期待する。

1993年6月16日

東京都知事
鈴木俊一
鈴木俊一

ニュー・サウス・ウェールズ州首相
ジョン・フェイ
John Fahey



JOINT COMMUNIQUE

Premier John Fahey of the State of New South Wales, visiting Tokyo from 15th to 17th June, 1993 has been warmly welcomed by Governor Shuzichi Suzuki and the citizens of the Metropolis of Tokyo.

The Sister State Relationship between the Metropolis of Tokyo and New South Wales was formalised in May, 1984 and since that time there have been a wide range of cultural, technical and economic exchanges between Metropolis and State that have contributed significantly to the friendship and understanding between our two peoples.

In reaffirming New South Wales' commitment to the relationship, and recognizing the significance of the "Urban Frontier - Tokyo '96", Premier Fahey announced New South Wales' participation in the "Urban Frontier - Tokyo '96" event in 1996, including the unique display of the Platypus, an internationally recognized symbol of New South Wales. The New South Wales Government has obtained the agreement of the Australian Government in the aspect of these native animals on the condition that satisfactory arrangements are made.

Governor Suzuki expressed his thanks for such support and pledges both the Metropolis of Tokyo and New South Wales will work closely together to meet the required arrangements and to achieve the success of "Urban Frontier - Tokyo '96". Governor Suzuki also confirmed support for research that will protect the Koala and other endangered species of native Australian fauna.

Both leaders look forward to participating in activities associated with the 10th Anniversary of the relationship in 1994 and to further strengthening the relationship as we approach the 21st Century.

June 16, 1993

Shuzichi Suzuki
Governor
The Metropolis of Tokyo

John Fahey
Premier
The State of New South Wales

図1. 東京でのカモノハシ特別展示に関する東京都鈴木俊一知事とニュー・サウス・ウェールズ州ジョン・フェイ首相の共同声明（東京都生活文化局国際部編，1994『1993年度都市提携交流事業のあらまし』より）

中止を明言したことが報道される（「都市博中止を明言 東京都新都知事 青島氏が『公約通り』」中日新聞 1995年4月15日朝刊）。そして、オーストラリア側でも、4月20日にはNSW州のアラン新環境相（Pamela Allan）が、都市博へのカモノハシ出展の撤回を発表する（「都市博へのカモノハシ出展を撤回 政権交代の余波で 豪の州政府」朝日新聞 1995年4月21日朝刊）。これには、州内の環境保護派から反対があり、政権交代の余波により中止となったとする解説報道もなされている（「世界都市博、珍獣にも逃げられた カモノハシ出展、豪が中止 環境団体が反発」読売新聞 1995年4月21日朝刊）。その翌日、4月21日には青島新都知事が会見で都市博中止の意向を表明するに至る（「『あくまで中止』縮小開催を否定 世界都市博」中日新聞 1995年4月22朝刊）。その後も都議会が開催決議を可決するなど、波乱があった（「世界都市博の開催決議案 賛成多数で可決 都議会特別委」中日新聞 1995年5月17日臨時）ものの、5月31日に青島都知事が最終決定をし、都市博は中止となった（「『都市博』を中止 青島・東京都知事が最終決断 公約の順守を優先 開催決議 議会と全面对決へ」中日新聞 1995年5月31日夕刊）。結果として、NSW州政府の政権交代と、都知事の交代が同時期に起きたことで、東京でのカモノハシ展示計画は一気に雲散霧消してしまった。

Ⅲ. カモノハシ移送の背後にある国際情勢・外交的側面

このように、過去にカモノハシはイギリス、アメリカ、日本という3か国に国外移送する計画が動いていた。しかし、この3か国へ移送する計画は、それぞれ目的も、計画を主導した組織も大きく異なるものであった。本章では3か国に対するカモノハシ移送計画の違いと、それに影響したであろうオーストラリアをめぐる国際関係の歴史の変遷について論じる。

イギリスへの移送に関わる豪政府とチャーチルの意図

カモノハシの移送に関するオーストラリア政府の意図を考える前に、第二次世界大戦前後におけるオーストラリアを取り巻く国際情勢について考えてみたい。以下、竹田（2000）に記述された当時の情勢をまとめる。1941年、太平洋戦争の勃発に伴い、長年の仮想敵国だった日本は現実の敵国となり、オーストラリアに迫ってくる。かつて対日戦略の要として期待された、シンガポールに海軍基地を建設するという「シンガポール戦略」は、開戦早々に極東艦隊の中核戦力が日本の航空隊により沈められたことによって機能しなくなる。1942年2月にはシンガポールが陥落し、オーストラリア北部の港町ダーウィンが空襲を受ける。こうして、オーストラリアは安全保障政策でイギリスに決別を告げ、アメリカに接近することになる。カーティン首相は1942年の新年のメッセージで「オーストラリアはアメリカを求める」（Lawrence 2009によれば「I make it quite clear that Australia looks to America」）と発言し、ウィンストン・チャーチルに送った電報では、イギリスがシンガポール基地を放棄することを「弁解の余地がない背信行為」と述べている。このように、第二次世界大戦は、オーストラリアの安全保障政策における、英国への依存から米国への依存という歴史的な転換点となっていった。

このような情勢のなか、カモノハシをイギリスに移送するにあたり、オーストラリア政府にはどのような意図があったのだろうか。チャーチルの申し出に対し、オーストラリア政府は即座に対応をしている。フレイのもとに移送の要請を送るほか、それに先立って、エバット外相は直ちにカモノハシ「スプラッシュ」の剥製を、わざわざ航空輸送でチャーチルのもとに送り届けている。なぜこのように即時の対応が行われることになったのだろうか。以下、Cushing and Markwell（2009）によれば、当時、オーストラリア政府が、イギリス政府がオーストラリア防衛を軽視しているのではないかと不信の念

を抱くいくつかの事案があった。特に、戦争の初期にオーストラリアから中東に派遣されていた3個師団の撤退をチャーチルが受け入れないことは大きな問題となっていた。しかし、1942年12月には、そのうち第9師団のニューギニアへの転進が認められ、チャーチルとオーストラリア政府の関係は改善していた。それに加えて、オーストラリア政府は英国に対して戦闘機の供与を期待しており、その背景のなかでエバット外相はカモノハシの移送をアレンジしたと論じている。なお、カモノハシの不着と関係しているかどうかは定かでないが、その後も英国からの軍事支援は少ないままで、飛行機の供与も約束の1/3のみであったという。

もう一つ、先行研究では触れられてこなかった重要な点として、最初に送られた剥製のカモノハシ「スプラッシュ」は、以前ロバート・エディー氏の飼っていたものだったことが挙げられる。オーストラリア生まれのエディー氏は、ボーア戦争の際、捕虜収容所から逃亡するチャーチルを手助けた隊に所属していた。エバット外相や関係者がこのことを認識していたかどうかは不明である。しかし、数あるカモノハシの剥製の中から「スプラッシュ」を選んで送ったという事実は、かつてオーストラリア人が戦争中、チャーチルを助けた歴史を想起させる意図があった可能性がある。「スプラッシュ」は、イギリス本国からの助けを必要としていたオーストラリア政府にとって、重要なメッセージを持ったカモノハシであったのかもしれない。なお、チャーチルの要望は「生きた」カモノハシであり (Fleay 1980; Moyal 2001)、スプラッシュやエディー氏のことは念頭になかったようである。

一方で、カモノハシの移送を要望した英首相チャーチルの意図はどこにあったのだろうか。フレイは味方の士気を高める宣伝効果を狙ったものと類推している (Fleay 1980)。Lawrence (2012) は、チャーチルが多く珍しい動物を飼育していたことや、ライオンを贈られたこと、黒い白鳥を取り寄せていたことを引合いに出し、チャーチルの動物収集趣味がこの要望につながったとしている。また、当時オーストラリアがアメリカを頼りにしていく中、イギリス・オーストラリア関係を象徴する品として、カモノハシを欲したのだとも論じている (Lawrence 2012)。

これら先行研究で論じられた理由に加え、チャーチルの側には、イギリスが大西洋の戦いに勝利しつつあるというプロパガンダにカモノハシを利用しようとする意図もあったのではないだろうか。チャーチルがカモノハシをリクエストしたのは1943年の3月、追加の催促をしたのが5月である。この時期、連合軍によるドイツ潜水艦の撃沈数が急増し、一方で連合軍船舶の喪失トン数が (短期的には上下しつつも) 減少していく時期に重なる (Peillard 1970: 巻末資料)。イギリスに到着したカモノハシは動物園で公開される予定であり (Cushing and Markwell 2009; Lawrence 2012)、無事に海を越えて到着したカモノハシは、このような海上護衛戦での勝利を宣伝する道具として十分すぎる存在であったろう。

民間が主導したアメリカへの移送

アメリカへの移送が試みられた最初の例は、1916年から1922年にかけてのジョセフ氏の試みであり、これは歴史上はじめての、オーストラリア国外へのカモノハシ移送の試みであると考えられる。当時、ブロンクス動物園の園長ホーナディは大金を払ってでも珍しい動物を入手することに尽力していた (Cushing and Markwell 2009)。たとえば、1902年にもゴールドディング (Golding) 船長が日本で購入した白いタヌキを含む、多くの動物を各地で入手し、ホーナディ園長の待つブロンクス動物園へと輸送していた (浅原 2016)。また、このような動物収集には複数人の船長が携わり、それぞれがライバルとして競争しつつ進められるほどの熱気であった (浅原 2016)。このようなブロンクス動物園側の旺盛な動物収集意欲と、輸送のためカモノハシ飼育の経験を積むまでの動物商ジョセフ氏の熱意 (Burrell 1927) が、このような移送を実現させたという特徴がある。オーストラリア・アメリカ間に

おいて行われた初めてのカモノハシ移送は、民間が主導したものであり、一方で政府の関わり方といえば、輸出許可をなかなか出さないなど、むしろ移送を妨害する立場であった。

これは1947年にフレイがカモノハシをブロンクス動物園に移送する際にも同様であった。ブロンクス動物園からの要請に答え、フレイはカモノハシを送る準備を始める。これは初めから動物園同士の協議のもと開始されたプロジェクトであった。いわゆる民間外交ともいえるプロジェクトであり、中央政府どうしが様々な思惑を持って協議し、主導した1943年のイギリスへの移送とは大きく特徴が異なる。そして、この移送も、やはりオーストラリア政府からの妨害に遭う。しかし、ここで移送が実現するに至ったのは、オーストラリアとアメリカとの戦時中の関係だった。フレイの友人ホロウェイ州首相の仲介で、メンジーズ氏、戦時中イギリスにカモノハシを送ることに尽力したエバット博士らの協力のもと、チフリー政権はカモノハシをアメリカに対する戦時中の返礼とみなすことで、移送を許可するに至る。民間が主導することで始まった民間外交は、中央政府どうしの外交の一環とみなされることで、ようやく実現をみることとなった。

こうして辛くも実現したカモノハシの移送であったが、それはオーストラリア・米国間のパブリックディプロマシーの大成功と言ってよい結果となる。展示開始前後は、New York Times 紙で連日、写真付きの大きな記事が掲載されており、現地でのカモノハシへの関心の高まりと、歓迎のムードにあふれた様子が伝わってくる（「Platypus added to zoo population」The New York Times 1947年4月26日；「Those platypuses, it appears, are snobs; sneezes express distaste for humanity」The New York Times 1947年4月28日；「Platypuses to come out to play in debut at the Bronx Zoo today」The New York Times 1947年4月30日など）。そして、その後11年以上の間、ニューヨーク・ブロンクス動物園の展示室前にはアメリカ合衆国とオーストラリアの国旗が掲げられ、多くの人々がその前を通り、展示へと足を運んだのである（Fleay 1980）。Fleay（1980）によれば、展示開始後、夏の間は毎日4000人が展示に訪れたということで、展示開始の入場を待つ大行列の写真も載せられている。カモノハシを「Expert Advertiser」と風刺した新聞記事では、毎時5000人以上のアメリカ人が展示を訪れたとの記述もある（「How zoos have helped to save fauna from extinction」Sun, Sydney 1947年6月26日）。別な記事では、1年4か月の間に25万人の人々が展示を見たとの記述がある（「Betty, one of Bronx Zoo's 3 platypuses, is dead after being exhibited 16 months」The New York Times 1948年9月7日）。民間が始めたカモノハシの移送は、冷戦の初期という時代の中、長きにわたってオーストラリアとアメリカ二国間の友好のシンボルを提供することになった。

日本への移送計画における自治体外交の存在感

第二次世界大戦から時間が経ち、オーストラリアと日本は重要な貿易相手国として交流を深めていく。60年代後半には、トップの輸出相手国がイギリスから日本へと変わる（竹田2000）。こうした中で、1990年代、オーストラリアのキーティング政権は「アジア化」を標ぼうするまでになる（竹田2000）。キーティング首相は1991年から96年まで政権を担当するが、その回顧録のなかでアジア太平洋の国々について6つの章を割いているのに対し、米国に1章、英国を含むヨーロッパの国々については、まとめて1章が割かれているのみである（Keating 2000）。とはいえ、日本という国単体で見えた場合、中国、韓国とともに「北アジアの国々」として1章が割かれているのみであり、そこまで多くの頁は割いていないことには留意が必要である（Keating 2000）。

こうした時代背景のなか、日本にカモノハシを送る計画が自治体同士の交流から生まれてくる。II章で扱った名古屋にカモノハシを送る話は、具体的な計画にまで行き着かなかったものの、名古屋とシドニーが姉妹都市提携をし、互いに交流し合う中から生じたものであった。一方で、東京都にカモ

ノハシを移送する計画は具体的な形で動き出していた。こちらも、NSW 州と東京都が友好協定を結んでいたことがきっかけであった。東京都において 1996 年に開催される予定であった東京フロンティア（世界都市博覧会）におけるカモノハシの展示は、フェイ首相の申し出で始まったという（「カモノハシ 3 年後に来日 豪で 60 年間門外不出の珍獣 東京フロンティアに出品」読売新聞 1993 年 6 月 17 日東京朝刊）。なお、この日豪の自治体外交で特筆すべきは、これらが自治体のトップ同士の間で計画が発案され、進んでいったことである。国家の中央政府が主導したイギリスへのカモノハシ移送や、民間が主導したアメリカへの移送とは、また異なった形での外交がここで展開されていたといえる。

このような自治体間の外交の背景として、NSW 州側には一つの思惑があったようである。それは、シドニーが 2000 年のオリンピック開催地として選定されるという目的である。名古屋市へのカモノハシ移送は具体的な計画まで至らなかったが、コアラの贈呈は繰り返し行われていた。1993 年のコアラ贈呈式でカモノハシの話が出た際に、フェイ NSW 州首相はシドニーのオリンピック開催地立候補についての支援要請を名古屋市長に行っている（「コアラの次はカモノハシを 西尾市長 豪の州首相に強い期待」中日新聞 1993 年 6 月 16 日朝刊・市民版）。これは、コアラやカモノハシを利用した NSW 州の自治体外交において、単に自治体間の親睦を深めることだけでなく、シドニーのオリンピック開催地獲得という目的があったことをにおわせる。さらには、フェイ首相が名古屋、東京を訪問し、東京で共同調印をした 2 か月後、1993 年 8 月に NSW 州スポーツ・レクリエーション・レーシング大臣であるクリス・ダウニー氏（Christopher Downy）が日本の IOC 委員と会見するために来日し、8 月 24 日に東京都の金平輝子副知事、教育庁次長と懇談を行っている（東京都生活文化局国際部、1994）。名古屋の事例でもそうだが、NSW 州の動物を用いた自治体外交は、シドニーへのオリンピック招致活動とタイアップしながら、戦略的に進んでいたと言える。こうした努力が実り、シドニーは 1993 年 9 月にオリンピック開催地として決定し、名古屋市もフェイ首相などに宛てて祝賀メッセージを送っている（「姉妹都市の縁 名古屋市長も祝賀コメント」中日新聞 1993 年 9 月 24 日夕刊）。なお、フェイ首相は（政治家としての業績に加え）シドニーオリンピック誘致の功績を特筆され、2002 年に勲章を授与されている（Companion of the Order of Australia: オーストラリア政府 Department of the Prime Minister and Cabinet サイトにおける勲章検索システムより）。

自治体トップによって始まったカモノハシ移送計画は、とくにオーストラリアにおいて、中央政府からの冷淡な対応や、一般社会からの反発に遭遇する。カモノハシの移送に連邦政府のケリー環境大臣は反対の意向であったし、一部の科学者からも反対の声を上げた（「Platypus pair may not travel for exhibition」Canberra Times 1993 年 6 月 21 日）。そして、ほかにも批判的な新聞記事は見当たらないのに対し（「Perils of a foreign platypus parade」The Age, Melbourne 1994 年 12 月 27 日）、好意的な新聞記事が見当たらないことから、一般社会がこのカモノハシ移送計画をあまり支持していなかったことが推察される。このような環境で、自治体トップが先走って始めたプロジェクトは、自治体トップが交代したとき、簡単に瓦解してしまうことになる。皮肉なことに、NSW 州と東京都はほぼ同時にそのトップが交代し、その政策は大きく方向性を変えることになる。1995 年の NSW 州州議会選挙と都知事選挙の結果、NSW 州のフェイ首相は退陣し、東京都では都市博に反対の青島都知事が誕生する。そして、アラン NSW 州新環境相はカモノハシの出展中止を発表し、青島新都知事も都市博の中止を表明する（表 2）。カモノハシが日本に輸送され、東京で展示される計画は、その前年に潰えてしまった。（注 4）

注 4：鈴木都知事は自著の中で、都市博が開催されれば必ず成功したであろうと述べ、中止を嘆いているが、カモノハシの展示については特に触れていない（鈴木 1997；1999）。

オーストラリアのカモノハシ外交の変遷

オーストラリアの“カモノハシ外交”は、イギリス、アメリカ、日本という3か国にたいして試みられたことがあった。しかし、それぞれの計画は主導した機関や目的において、全く異なる背景や目的を持っていた。イギリスに対しては、戦時中のきわどい外交政策の一環であった。一方で、アメリカへの移送計画はどこまでも民間主導であった。それが中央政府によって止められようとする過程で、民間からの訴えかけによって国家間の外交という文脈を付与され、ようやく実現に動いた。一方で、日本への移送は、自治体外交の一環であり、とくにオーストラリア側にとってはシドニーオリンピック招致と関連した活動であったといえる。そのため、イギリスへの移送は一度きりであり、日本への移送計画も自治体トップが替わることで計画は雲散霧消した。その一方で、アメリカへの移送は動物園間の交流から何度も繰り返し試みられた。

このように、計画を主導した組織や目的は異なるものの、移送計画のあった先は、オーストラリアの歴史的な国際関係の変遷と不可分ではなかった。オーストラリアはミドルパワー国家として、強国との関係が国家の重要課題でありつづけてきた（竹田 2000）。第二次世界大戦前・戦中は日本の脅威からいかに国土を守るかということに腐心することになり、1943年、国防を依存するイギリスからの要請に対してカモノハシを送ることになる。一方で、第二次世界大戦中、それと並行する形でオーストラリアは国防をアメリカに依存するようになっていく。そして、戦後すぐ、1947年のアメリカへのカモノハシ移送は、“戦時中の返礼”としての意味を付与されることになる。そして20世紀も後半になり、政府がアジア化を掲げる中、最大の貿易相手国である日本との間で自治体外交が活発化する。シドニーオリンピック招致という側面はあったにせよ、そういった交流の中で日本へのカモノハシ移送計画は動いていた。カモノハシはオーストラリアを象徴する動物の一つであり、さらに神経質で輸送が難しいことから、そういった動物のなかでもっとも国外に持ち出される機会の少なかった動物といえてよいだろう。そのようなカモノハシの移送がどこに向けて計画されたかは、まさにオーストラリアが時代ごとに経験してきた国際関係の縮図とも言えるものであった。

カモノハシ外交その後

このようなカモノハシ外交は今後試みられる可能性はあるのだろうか。これまでの事例を見ても、動物福祉の観点から、国外への移送は困難になりつつあると言えるだろう。1996年の日本への移送計画では、州政府の主導で進みかけたが、中央政府や民間からの反発は大きかった。確かに、カモノハシを国外で展示することは、集客の面でも、外交の面でも、大きな効果があるだろう。しかし、大成功であった1947年からのニューヨーク・ブロンクス動物園でのカモノハシの展示も、やはり11年間程度（1958年の再送付を含めても12年間程度）で終わってしまっていることには留意する必要がある。動物の場合、離れた土地で継続的に飼育することは、長期的には困難を伴う。一方で、植物はどうだろうか。日本がかつてワシントンDCに寄贈した桜は、100年以上に渡ってアメリカ合衆国の首都で咲き続けている。まさに生き物を用いた外交における最高の成功例と言えよう。一般に動物よりも植物の方が容易に長期間維持できることから、長く二国間関係を象徴してくれるような気がしてならない。

とはいえ、オーストラリアの象徴ともいえるカモノハシを国際舞台でアピールする意義は現在も健在である。しかし、それは実際のカモノハシではなく、キャラクター化、偶像化したカモノハシを用いることでも、ある程度達成される。2005年の愛知万博では、オーストラリア政府は3500万豪ドル（当時で約30億円）を投入した展示を作成し、その目玉として巨大なカモノハシ模型を設置した（「オー

ストラリア 30 億円投入 愛知万博出展」朝日新聞 2004 年 2 月 20 日朝刊)。万博のオーストラリア館の展示はカモノハシだけではないため単純な比較はできないが、1996 年の都市博で、カモノハシ展示の設置に 2000 万豪ドルの費用が見込まれていたこと（「Two expatriates make a home in the Bronx Zoo」The Age, Melbourne 1994 年 12 月 17 日）を考えると、それを上回る額となる。この巨大なカモノハシの模型は多くの日本人の心を魅了し、万博の後、三重県四日市市のオーストラリア記念館を経て、2015 年から三重県津市の私設博物館・樋口友好ミュージアムで公開されている（「巨大模型『カモン』津へ 四日市の豪州館引っ越し 25 日にオープン」中日新聞 2015 年 1 月 23 日朝刊）。この巨大カモノハシ模型は、この稿を書いている 2016 年末の時点で、日本人々に 11 年以上その雄姿を見せていることになる。その期間は、ニューヨークに送られたカモノハシたちのそれを上回りつつある。（注 5）

謝辞

本稿を作成するに当たり、村上友章先生（三重大学教養教育機構）には研究計画の相談から情報収集方法のご教授、内容についての議論など、多くの面でご指導いただきました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。また、奥田久春先生（三重大学教養教育機構）には新聞記事検索に関してお世話になりましたこと、御礼申し上げます。加えて、情報公開請求に対応していただいた東京都の担当者各位に感謝いたします。

引用文献

- Asahara M., Koizumi M., Macrini T.E., Hand S.J., Archer M. (2016) Comparative cranial morphology in living and extinct platypuses: Feeding behaviour, electroreception and loss of teeth. *Science Advances* 2: e1601329.
- Burrell H. (1927) *The Platypus: Its discovery, zoological position, form and characteristics, habits, life history, etc.* Angus & Robertson, Sydney.
- Carrick F.N., Grant T.R., Williams R. (1982) Platypus *Ornithorhynchus anatinus*: its captive maintenance. In: Evans D.D. (Ed.) *The management of Australian mammals in captivity*. Zoological Parks of Board Victoria, Melbourne. Pp. 4-12.
- Crandall L.S. (1963) Family Ornithorhynchidae: Platypus or duckbill. In: Crandall L.S. (Ed.) *The management of wild mammals in captivity*. The University Press, Chicago and London. Pp. 19-24.
- Cushing N. and Markwell K. (2009) Platypus diplomacy: animal gifts in international relations. *Journal of Australian Studies* 33: 255-271.
- Fleay D. (1944) *We breed the platypus*. Robertson and Mullens, Melbourne.
- Fleay D. (1980) *Paradoxical Platypus: Hobnobbing with duckbills*. The Jacaranda Press, Gladesville.
- Holland N. and Jackson S. (2002) Reproductive behavior and food consumption associated with the captive breeding of platypus (*Ornithorhynchus anatinus*). *Journal of Zoology* 256: 279-288.

注 5：この全長 12m の巨大なカモノハシ模型は、四日市のオーストラリア記念館が閉館される際に解体の危機に直面した（『カモン』解体危機 四日市」中日新聞 2014 年 1 月 8 日）。四日市市が引き取り先を募った際、著者も解体されるのは忍びないと考え、四日市市にコンタクトを取った。市の意向としては、できれば三重県内の展示施設に引き受けてもらいたいとのことであった。他に引き取り先が無いならば個人で引き受けることなども考慮の上、四日市市と連絡を取り合っていたが、有力な施設が名乗り出て下さったのは幸いであった。

- Jackson S., Fisk L., Holland N., Serena M., Middleton D. (2001) *Platypus Ornithorhynchus anatinus*: Captive Husbandry Guidelines. Healesville Sanctuary, Melbourne.
- Keating P. (2000) *Engagement: Australia Faces Asia-Pacific*. Pan Macmillan Australia [ポール・キーティング著 山田道隆訳 (2003) アジア太平洋国家を目指して オーストラリアの関与外交. 流通経済大学出版会]
- Lawrence N. (2012) The prime minister and the platypus: A paradox foes to war. *Studies in History and Philosophy of Biological and Biomedical Sciences* 43: 290-297.
- Moyal A. (2001) *Platypus: The extraordinary story of how a curious creature baffled the world*. Allen & Unwin, Sydney.
- Peillard L. (1970) *Histoire Générale de la Guerre Sous-marine (1939–1945)*. Robert Laffont, Paris. [レオンス・ペイヤール著・長塚隆二訳 (1976) 潜水艦戦争. 早川書房]
- United States Department of State (1943) *Foreign relations of the United States. Conferences at Washington and Quebec, 1943*. U.S. Government Printing Office.
- 浅原正和 (2014) 生物学の教育教材としての博物館展示の一例と博物館を教育に利用する意義について. 中京大学教師教育論叢 第3巻 : 45-52.
- 浅原正和 (2016) 1905年にニューヨークの動物園にいたあるタヌキの来歴. 三重大学教養教育機構研究紀要 2016 : 23-28.
- 家永真幸 (2009) 南京国民政府期における中国「パンダ外交」の形成 (1928–1949). *アジア研究* 55 (3) : 1-17.
- 家永真幸 (2011) パンダ外交. メディアファクトリー
- 鈴木俊一 (1997) 回想・地方自治五十年. ぎょうせい
- 鈴木俊一 (1999) 官を生きる—鈴木俊一回顧録一. 都市出版
- 竹田いさみ (2000) 物語オーストラリアの歴史. 中央公論新社
- 辻井禎 (1999) カモノハシの生物学. *山口獣医学雑誌* 26 : 27-44.
- 東京都生活文化局国際部 (1994) 都市提携交流事業のあらまし (1993年度). 東京都
- 東京都生活文化局国際部 (1995) 都市提携交流事業のあらまし (1994年度). 東京都

“Platypus diplomacy” in Australia: from World War II to the present.

Masakazu ASAHARA

Abstract

Historically, animals have been used as gifts among nations for diplomatic purposes. Previous studies have reported that Australia sent platypuses to the U.K. and the U.S.A., terming it “platypus diplomacy.” Additionally, a plan was attempted to send platypuses to Japan in the 1990s. These three plans were executed by different organizations for different purposes. A platypus was sent to the U.K. in 1943 on Winston Churchill’s request, but it was a part of the Australian government’s foreign policy during wartime. Until now, this fact was said to have been confidential during wartime, but a newspaper article reporting this during wartime have been found. Before the living specimen, Australian government sent Churchill a stuffed platypus specimen which had been bred by Robert Eadie, who had belonged to the troops that helped Churchill during the Second Boer War. From 1916 to 1958, attempts to send platypuses to the U.S. were led by the private sector, including an animal dealer and zoos. Hence, a zoo led the sending of a platypus to the U.S. in 1947, but the Australian government considered that platypus to be a gift from the Australian prime minister to the U.S. president, recognizing their wartime services. Premier John Fahey of New South Wales and Governor Shunichi Suzuki of Tokyo led the plan to exhibit platypuses in an exposition held in Tokyo in 1996 as municipal diplomacy; however, the plan was withdrawn after the premier and governor changed in 1995. The various destinations of platypuses were related to the transition of Australia’s international situation. Before and after World War II, Australia shifted from depending on the U.K. to the U.S.A. for national defense. In the late 20th century, active municipal diplomacy with Japan, which became their largest trading partner, led to the plan to send platypuses to Japan.